



西南の杜

第十二号

2017.5

西南の杜

第十二号
2017

西南の杜

人生の今を愉しむ

私の終活	西村杏子	7
私の健康奮闘記	大庭伸治	16
「梅漬け」	糟須海圭子	19
粘土で作るミニチュアスイーツとバラに導かれた日々	加藤由美子	23
徒然なるままに(近況)	井ノ口美佐子	27

戦争の記憶

続古今 山歩雑記	小野和人	35
広島を訪れて(オバマ大統領のスピーチを受けて)	岩田安代	43
還らざる青春	八尋俊子	46
アレクサンダー・ワースが見た1930年代のフランス	近昭夫	54

アジアを旅する

デリーで「暴動」に巻き込まれて	新谷恭明	73
台湾B P W (Business and Professional Women) 台中クラブ訪問記	黒岩英子	79

地域の歴史

周望学舎での学び	池田博子	85
「常盤高校事件」について	伊佐勝秀	90
八幡を訪ねて — 石川報告書の光と影 —	中村好教	98

男、女、家族

ドメスティック・バイオレンス被害の女性とかわかって	三村保子	111
— 寄り添うこと、支えること —	大里克夫	117
懸け橋 — ノンフィクションライフストーリー(四) —	相良かおる	126
酒と泪と男と女	柳澤伸一	130
家族擁護論の背景	柳澤伸一	139

宗教・信仰と文化

恩師ドリス宣教師との出会いから	鍋倉勲	139
覚え書き 宗教と人間	関田武純	147
聖書(イエス様の御言葉)を語る(Ⅲ)	橋田光太郎	157
The Cultural Dialogue: What Lies Ahead? — Communication with Yourself and Others —	HASHIMOTO, Mitsuhiro	166

編集後記

柳澤伸一	183
------	-----

デリーで「暴動」に巻き込まれて

新谷 恭明
(看護学科)

二〇一六年二月二〇日から二八日まで、インドを旅行した。いつも古いつきあいの木村政伸氏(当時新潟大学教授、現九州大学教授)に引率してもらったの旅だ。一人では行つたことはない。しばしば、彼に連れて行ってもらっている。

今回の一行は僕ら二人と青山学院短大のS教授、元中学校の校長先生が二人と木村氏の教え子である新潟大学の女子学生が二名の七名であった。

青短のS教授は大学院生時代からの古い友人で彼もしばしば木村氏に連れられてインド旅行を楽しんでいる仲間だ。校長先生のお一人は三〇年程昔に一度インド旅行をしたというが、あとのメンバーはインド初体験というグループであった。

旅行社のツアーではなく、木村氏の自由な企画によるも

ので、いわゆるバックパッカーというか、リュック一つを背負つての旅である。尤も年齢が嵩んできてからは「なるべく一箇所の滞在時間を長くしてほしい。」という要望は聞いてもらっている。

とは言え、インドというところはいろいろとおもしろいことが起きる。僕が初めてインドへ連れて行ってもらった時はちょうど高校生だった娘も連れて行ったのだが、ネパールでハイジャック騒ぎがあり、その煽りを食つて、予定していた飛行機は飛ばないことになり、バラナシからカトマンズまでまるまる二日間、バスに乗って移動するというハードな体験をした。スマトラ沖地震のときも僕はインドにいた。そしてその前年に旅をしまわったコースがほぼ津波で壊滅したというつらい記憶もある。

それはさておき、コルカタに着いたインドの初日だったか二日目だったか。携帯に若い友人からメールが入った。「先生、インドに着いたつすか。デリーで暴動があったらしいつすよ。気をつけてください」

おお、これはまずい。早速、ツァーリーダーの木村氏に伝える。木村氏は、「へええ」

と小さな驚きを口にはしたものの、彼の反応はそれだけであつた。まあ、特に街中もテレビもホテルも何も起きちゃいない感じでのんびりしているので、すっかりそんなことは忘れてしまった。インドは広い。その程度のことでは動じないのである。

ただ、今回驚いたのは至るところに空港の保安検査場のような金属探知施設が設置されていたことだ。地下鉄の駅や公共施設には必ずといっていい程置かれている。それと交番。そういったものは以前は全くなかったのだが、テロ対策なのだろうか、インドの中に政治的に不穏ななにかがあるのかもしれない。それは感じざるを得なかった。

ということで、メールの件は後からインターネットで確認すると次のような話だったらしい。(インドでカースト暴動、死者四人 スズキ系列は操業中止)と題した記事でインドの首都ニューデリー近郊で、特定のカーストの集団が、被差別カーストに与えられる公務員採用や大学

向かうのだそう。

「空港線が空港直結ではなくバスで行くんだと？」

納得しにくい話だが、成田でも同様のことを味わったから、まあ、そんなものなのだろう。バスはすぐきた。かなりの渋滞を越えて地下鉄の駅に着く。しかし、切符売り場がない。どうやら保安検査場を抜けてから買うらしい。

保安検査場をとり、割り込む客に辟易しながら何とか切符を買ってホームに降りる。きれいな駅だ。フルにホームとレールがガラスの壁で分かれていて、電車がくると扉がスライドして開くという形式だ。

電車が入ってきて、扉が開き、電車のドアも開いた。デッキは非常に広い。広いのだが、そこに大量の荷物が足の踏み場もないくらいに投げ出されていてその山を越えるのがたいへん。何とかクリアして席に着いた。

わかりにくいだろうから繰り返そう。電車は超モダンな電車だ。全体に白のトーンだ。座席や通路もゆつたりしている。座席は二人掛けが進行方向に向かって並ぶ形式のもの。ドアから入ると座席のない空間がかなりのスペースであり、それを先ほどデッキと書いた。デッキの両端には大きな荷物用の柵である。

で、繰り返し。その柵には荷物は一つも置かれてなく、すべてがデッキ的空間に投げ出されて、山となっていたのだ。

入試などでの優先枠の割り当てを求めるデモを始めて暴徒化。二〇日までに少なくとも四人の死者が出たほか、道路の封鎖などで日系企業の操業にも影響が出ている。

ニューデリー近郊のハリヤナ州ロータクなどでデモを始めたのは「ジャート」と呼ばれる、伝統的に自作農とされるカースト。被差別カーストに対して与えられる優先枠の割り当てを求め、道路や線路を封鎖。州政府は一九日、一帯に外出禁止令を出し、軍を派遣した。

もつとも、メールを受け取った段階でそんな詳しいことは知るよしもない。インドの抱えている社会問題もふつうに街を歩いていくくらいではわからない。

それからインドの旅は始まった。コルカタではマザー・テレサの偉業に胸うたれ、コルカタから DOON EXPRESS でガヤへ。ブッダガヤで仏陀の悟りを疑似体験し、バラナシではガンジス川で指先だけの沐浴をし、バラナシからデリーに飛び、最後の二泊を過ごすというのが予定であった。とりあえず旅は少しずつ疲労を蓄えながら予定通りに進んでいた。デリーへのフライトも順調であった。女子学生の一人が体調を崩していたことを除けば。

デリーにはほぼ定刻に着く。ここから地下鉄で行く、というので (METRO) の看板の方に行くが、その文字が消え、シャトルバス乗り場に私たちは着いていた。木村氏がコーナーのカウンターにいる男に聞くとバスで地下鉄駅に

電車がニューデリー駅に着いた。突然同じ車両に座っていた白装束の人たちが荷物に群がり、それらをホームに並べ始めたのだ。それもドアの幅いっぱい、まるで乗降を拒むバリケードのようにだ。ドアの右端をブロックする荷物がまだ一個だったので、それを飛び越えて僕はかろうじてホームに降りることができた。いったいあの白装束の人たちは何者だったのだろうか。

地下鉄空港線ニューデリー駅は他の地下鉄と繋がっていない。駅の反対側にロータリーを挟んで出口がある。出口を出た。木村氏が暗い空の先を指で指す。

「あれがニューデリー駅だ。さて、どうやって行こうか。僕らの泊まるホテルは駅の向こう側なんだ。」

僕は『地球の歩き方』で学習したニューデリーの地図を思い起こしていた。

駅を向こうに抜けければロータリーを超えて真ん中の通りを一〇分ほど行く)

その地図に今観ている景観がおかれてリアリティが増していく。地図というメタ世界が現実世界に徐々に転換していく。

木村氏はしばしば立ち止まったが、意を決したように歩き出した。「取り敢えず、こっちへ行くか。」

われわれは木村氏に従い、駅へ駅へと手探りするようになつていった。リクシヤの群れをいかくぐると駅舎の前

についた。大きな駅だ。僕たちはその駅に（向かって右端）のほうにいた。その右側に上っていく階段がある。

「これを上がれば向こう側に抜けられるはずだ。」

僕らはちよつとだけ躊躇ったところで、その階段を上ろうとした。その時である。

「そっちはダメ。行けませんよ。」

若い男が声をかけてきた。木村氏は一端無視してそのまま行こうとする。

「ダメダメ、そっちはNo Entryだから」

見ると確かに〈No Entry〉と記されたプレートが見える。しかたがないので僕らは駅舎内に入ることにした。駅舎内は広々とした空間となっていた。人もそこそこに賑わっていた。そしてやはり右側に上っていく幅広い階段があったのでそちらが連絡通路だろうと目星をつけその階段からいくことにした。

階段を中程まで上ったとき、先ほどの若い男が飛んできた。

「ダメダメ、そっちなじゃないです。そっちは閉鎖されてますよ。向こうに行かなくちゃ」

男は向かって左側の方を指し示す。

「ごっさい」

駅舎の向かって左端のほうを見ると遠くに階段らしきものが見える。

「あつちから行けということかな。」

「いや、これでいいはずだが……」

木村氏の疲れた脳はぶりぶり音を立てて判断をしようとしていた。そして再び階段を上ろうとすると、先ほどの若い男が制止する。

「そっちは閉鎖されているので行つても無駄だから、あつちね」

やむをえず、われわれは彼の指示通りに駅舎の中を移動することにした。右側には改札口があり、そこにも保安検査場があつて、銃を構えた兵士もいる。乗客が列をなしているところもあつた。しばらく歩いて行くと階段はあつたが、その前にも保安検査場がある。

「いや、この保安検査場は入構用だろう。場所がちがうんじゃないかな。」

僕が訊くと木村氏もちよつと困つたようだった。女学生のBさんが体調が悪いらしくふらふらしている。かなり心配だ。一刻も早くホテルに入つて休ませたい。気持ちは焦っていた。

そこに保安検査場の脇にいた小柄な中年男がやってきた。保安検査場にかかわる人間かもしれない。そういう雰囲気を持つた男だった。

「どうしたんだい」

「いや、向こうに抜けようと思つてね。連絡通路は何処にあるかな。」

木村氏が答える。

「向こうに抜けるだつて？」

「そうだよ、ホテルはあつちだからね。」

「ホテルはどっさい？」

「ホテル・シエルトンだ。」

「あつちはダメだよ。暴動があつてね、その地域一帯が閉鎖されている。死人も何人か出ているから、危険な状態だ。」

「おいおい、どうなつてんだ？」

僕は木村氏の顔を見た。そう言えば初日に受け取つた「暴動があつてみたいっすよ」というメールが脳裏に浮かんた。木村氏も同じことを考えていたようだ。男は戸惑っている僕らの様子を案じるように言った。

「ホテルがそつちななら、それはお気の毒だ。ホテルはみんな宿泊禁止だ。」

「えっ！　なんてこつた。」

動揺が走つた。

「ところで、連絡のつく携帯電話は持っているかい？」

「いや」

「どれどれ、ホテルの電話番号を見せてみな。」

男は自分の携帯に番号を打ち込む。やがて向こうとなにやら話した後、電話を木村氏にまわした。

「もしもし、ホテル・シエルトン？　僕は予約している木村だが、どうなつてんだ？　えっ？　エリア一帯が閉鎖？」

死者は？　ふむふむ、そうかい。えっ？　ああそう。うーむ、そうかね。」

電話のやりとりから察するに、ホテルのある一帯のエリアは閉鎖されていて、宿泊はもちろん、そこに入ることもできないらしい。

振り向くとBさんはしゃがみ込んでいる。一刻も次の対応を考えないとBさんの体調も気になる。男は我々の難渋ぶりを見て言った。

「こつ言うのも何だが、こつち側でホテルを探しちゃどうだい？」

その時、木村氏が自分の携帯を取り出した。

「ちよつと代理店と連絡を取つてみる。」

木村氏が使えないはずの携帯を手に取り番号の検索を始める。男が言った。

「リクシャに新しいホテルを訊くがいいよ。」

男の言葉を無視して、木村氏は電話をしまふと

「行くぞ」

と駅舎の外に出た。我々も続く。男は慌ててあとについてきたが、それを振り切つてわれわれは外に出た。そこにはやはり階段があり、保安検査場がある。みかけは連絡通路だ。木村氏が保安検査場の検査機に荷物を放り込む。

「そつちに行くのか。」

疑心暗鬼で後に続いた。

なんてことはない。保安検査場を通り抜けて、階段を上るとそこは連絡通路だった。それを抜け、駅の反対側に出るとそこはふつうに街であった。脳裏にたたき込んでいた地図を思い出す。

「おつ、あの通りだな。」
「そう、そっちです。」

木村氏は自信満々で歩き始めた。確かに暴動でもあったかのような乱雑さではあるが、それは「日本なら……」という前置きがつく。「インドなら……」と考えれば、コルカタと変わらぬ街並みだ。いや、コルカタより散らかし方が大胆と言えば大胆だが。

「あれですよ。」

三〇メートルくらい先をさして木村氏が叫んだ。SHELTONの看板が見える。少し元気が出てきた。街は平穏である。ホテルに入った。閉鎖どころかフロントはのんびりと対応しているし、ロビーには眠そうな観光客がくつろいでいた。フロントのホテルマンが欠伸をかみ殺しながら言う。

「ナマステ」

「ナマステ」

ニューデリーは平和だった。

なんてことはない。あの二人はグルでわれわれをそっくり別のホテルに押し込もうという算段だったらしい。インドはいつだっておもしろい。



台湾BPPW (Business and Professional Women)

台中クラブ訪問記

黒岩英子

(元保育科)

昨年十二月十六日から十九日まで、台中市を訪れた。私が所属している日本BPPW北九州クラブと台中クラブとがツィニングをしたため、表敬訪問の意味を込めた旅であった。当クラブ会員四人が台北空港の到着ゲートを出るや、台中クラブ員の出迎えを受けた。タクシーで桃園駅へ、そこから高速鉄道に乗り継いだ。台湾が誇る新幹線である。台中市のホテルに荷物を運び入れた後は、台中国家歌劇院（伊藤豊男設計デザインのオペラハウス）の見学である。天井と壁・床など曲線を描きながらダイナミックに空間が広がる。いたるところ斬新である。小学校や中学校の子どもたちや芸術家らしい人たちも見学している。

翌日（十七日）は、台中クラブ七周年記念式典と会長の交代セレモニーに参加した。会場は広い結婚披露宴会場。五十数名の会員とその家族・友人、および台湾各地からのクラブ会員が主な出席者。それに祝賀会の来賓十人くらいと北九州クラブからの四人で満席。壇上には講演者（大学の先生）とギタリスト。講演は有名な詩や文学のお気に入りの箇所がステージの両サイドのスクリーンに映し出された。漢字である。眺めてみてなんとなく想像できた。合間にギター演奏と弾き歌い。日本の曲もあった。

一テーブル十席ぐらいの台の上には小さな盆栽が置かれ、台湾式お茶とお菓子の接待である。